



Data

監督・脚本: 大森立嗣

出演: 長澤まさみ/奥平大兼/夏帆
/皆川猿時/仲野太賀/土村芳/荒巻全記/大西信満
/木野花/阿部サダヲ/郡司翔/浅田芭路

■■■ショートコメント■■■

◆長澤まさみのデビュー作は『クロスファイア』(00年)で、13歳の時。私はそれを観た。それから20年、今やすっかり東宝の看板女優に成長した彼女は、『キングダム』(19年)では女王・楊端和役を演じた(『シネマ43』274頁)。また、『マスカレード・ホテル』(19年)では山岸尚美役で木村拓哉と対決した(『シネマ43』251頁)。

そんな女優・長澤まさみが、大森立嗣監督の本作で初の汚れ役に挑戦! チラシには「すべてを狂わせる《この女》 聖母か。怪物か。」の見出しが躍るが、本作で彼女は一体どんな母親役を?

◆導入部における、妹(土村芳)も同席する中での秋子(長澤まさみ)の借金要請のシークエンスで、おおむね秋子が妹と違ってなぜここまでひねくれているのかが明確にされる。父親はややこしい話から逃げ出してしまったが、母親(木野花)からは妹のアドバイスに従って、「金輪際金は貸さない」と宣言されてしまったから、秋子はアレ・・・?しかし、落ち込んだ中でも、ちゃっかりゲーセンでホストの遼(阿部サダヲ)を引っ掛け(?)その日のうちに家の中まで連れ込んだから、秋子の男好きも相当なものだ。

しかし、残念ながら遼も見込み違いのクズ男だったから、秋子の足手まといのような、それでいて便利にこき使われている長男・周平(奥平大兼)の父親役をまともにやれるはずはない。そのため、遼との同棲生活の中で秋子の生活は安定しなかったばかりか、周平をダシに使った良心的な市役所職員・宇治田守(皆川猿時)に対する恐喝まがいの行動では、秋子が誤って宇治田を刺してしまったから大変だ。殺人事件で指名手配か?そんな前半のハイライトは如何に?

◆長澤の美人ぶりは若いころと全く変わらないし、のびやかな肢体にも衰えは全くない。そのため、「もう限界!」。そう言って遼が秋子の元を去ったのちも、ラブホテルの2代目

経営者の赤川圭一（仲野太賀）といい仲になっていく。また、17歳に成長した周平が起こす殺人事件の伏線の中でも、土建業経営者の男と一瞬いい仲になっていく。

子連れの方が面倒なことは男なら誰でもわかるから、できればそんな女は避けたいのが正直な男心だが、本当に困り切った状況下で切なそうに見つめられ、「すべてを許すよ」というサインを送られると、ついつい男は・・・？

そんなシークエンスを見ていると、本作で長澤が演じた秋子は怪物であることは明白で、決して聖母とは思えないが・・・。

◆チラシによると、本作は実際に起きた殺人事件に着想を得て、大森監督が「ニュースでは報じられないビハインドストーリーとして、新たな物語を紡ぎ出したもの」らしい。本作のストーリーは、年代を追って構成されているが、メインは周平が17歳になってからの後半だ。しかし、小学校にも行っていない周平が、フリースクールに通う中で学校に行きたいと願ったり、母親と幼い妹・冬華（浅田芭路）を養うために一生懸命になって働く姿はある意味で立派だが、ホントにこんな環境下でいい青年に育つのか？私にはそんな疑問がある。

また、再度登場してきた遼を含めて、あらゆる男との縁を切り、あらゆる身内との縁も切れた後の、「ばばあでも殺すか？」という問題提起（発想？）にもかなり違和感がある。いくらバカでも、実の母親を殺して金を奪っても捕まるだけだということくらいはわかるのでは？また、いくらバカでも、本気で事を起こそうとすれば、少しは計画を練り、成功の確率の高い方法を考えるのでは・・・？

キネ旬7月下旬掲載号の「レビュー」では、2人の評論家が星5つをつけて絶賛しているが、私には女優・長澤まさみの転換点となる映画というには、本作はかなり不十分な気がするが・・・。

2020（令和2）年7月13日記